

報告

国際教育プログラムと成果測定・評価を考える (2017年度関西支部大会 シンポジウム 報告)

横川 綾子^A

2018年2月17日関西大学千里山キャンパスにおいて、2017年度関西支部大会が開催されました。「グローバル人材を育成する国際教育プログラムの学習効果～留学や学習活動で『何』を習得したのか～」を大会テーマに、古村由美子教授(長崎大学)による特別講演「異文化対応力測定方法開発の試み: カテゴリーと質問項目の観点から」に続いて、約1時間のシンポジウムが開催されました。

本シンポジウムは、「国際教育プログラムと成果測定・評価を考える」をテーマに、小野博グローバル人材育成教育学会会長をファシリテーターとして、以下4名のシンポジストを迎えて進められました。

【登壇者】

古村 由美子(長崎大学 教授)
 青柳 達也(佐賀大学 非常勤講師)
 横川 綾子(明治大学 特任准教授)
 池田 佳子(関西大学 教授)

まず、横川からは、明治大学の海外派遣プログラムの概要とその教育効果として期待される能力を提示し、古村先生が特別講演で発表された「異文化対応力測定テスト(案)」に関する提案をいたしました。参加者に配布されたプレテストは、1つの設問に対して2択または4択の回答形式を採用していますが、こうした選択式の自己評価に加え、タスクベースの設問(例:ある異文化衝突の設定において適切な言動や解決策を述べる)を追加する可能性を検討する意義を述べました。

次に、青柳先生からは、「国際教育プログラムと効果測定・評価を考える～高等学校の場合～」と題したご発表があり、高校生を対象とした国際教育プログラムの現況と高校での成果測定・評価の妥当性を、佐賀県内の公立・私立高校の英語科教員5名へのインタビュー結果も交えて、論じられました。その中で、大学の合格実績に注力せざるを得ない高校では、グローバル人材育成まで手が回らない現実もあり、都心と地方での教育格差や意識の違いも顕著であると、見解を述べられました。

A: 明治大学国際連携機構

さらに、池田先生からは、関西大学における2016年度海外派遣実績のご報告があり、短期留学560名、中長期留学435名、その他合計1063名とのことでした。そして、海外派遣プログラムの運営・拡充に必要な予算獲得における論拠の1つとなる効果測定の必要性を強調されました。効果測定方法の検討には、松下佳代教授（京都大学高等教育研究開発推進センター）による学習評価の構図（松下, 2012）¹⁾を参照されているとのことでした。

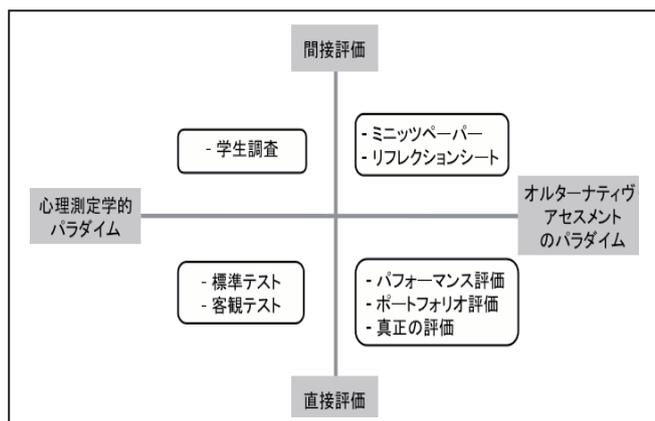


図1 学習評価の構図

まとめとして、古村先生が、国際教育プログラムの効果測定の必要性を再度強調され、その教育効果を種々のステークホルダーに対して客観的な数値で示す

ことの重要性に言及されました。「異文化対応力測定テスト(案)」はそのニーズに応える試みであり、産学を問わず協力を仰ぎつつ、異文化対応力育成専門部会を中心に開発を進めていきたいと述べられました。

フロアからは、異文化対応能力の「伸び」を測定するのであれば、調査対象者の海外派遣前のバックグラウンド（例：身近な異文化交流の機会の有無）等を問う質問項目があっても良いのではないかとのご意見が出ました。また、日本語を母語としない学生に対しても調査できるよう、将来的には英語版もあると良いのではないかとのご提案もいただきました。

最後に、小野会長から、関西支部大会当日に実施された「異文化対応力育成専門部会ミーティング」での議論を受け、引き続き「異文化対応力測定テスト(案)」の改良を進めること、グローバル人材育成教育に携わる関係者の協力を仰ぎたいこと、ご意見ご提案は古村先生までお寄せくださるよう、要請がありました。

引用・参考文献

1) 松下佳代.(2012). パフォーマンス評価による学習の質の評価：学習評価の構図の分析にもとづいて. 京都大学高等教育研究 (18), 75-114, 2012-12-01. <https://ci.nii.ac.jp/els/contents110009535957.pdf?id=ART0009984458> (2018年2月23日参照)

受付日 2018年2月23日、受理日 2018年3月10日